



わたしの研究 ④6

テーマ

運動遊びが好きな 子どもたちを育てるために

栗原 武志



1. 私の経歴

～保育者養成に携わって～

熊本学園大学に赴任して2年目に入りました。私は、社会福祉学部子ども家庭福祉学科に所属し、将来保育

士や幼稚園の先生を目指す学生を対象に、子どもの運動や遊び、スポーツについて講義や実技などを担当しています。

本学赴任以前は、兵庫県尼崎市にある園田学園女子大学の短期大学部にて、5年程同じような科目を担当してきました。なお、園田学園はテニスで有名なクルム伊達公子さんの出身校で、大会前などはよく学内のテニスコートで在学生会や卒業生を相手に調整されていました。在学生会や卒業生といっても、在学生会は日本大学界でもトップクラスの学生。卒業生もプロのテニスプレーヤーです。そんな世界レベルの練習風景を見ながら、隣のコートで授業をしていました。世界レベルで活躍している彼女に接して、学生と共に私も良き学びの機会を経験しました。

2. 小学校教員を経て研究生生活へ

大学という教育・研究機関に身を置き、もうすぐ10年になろうとしています。本来私の夢、就きたい職業は別のものでした。小さい頃から小学校の教師に憧れ、小・中・高と出会ってきた先生方のように温かみをもった教師になればと思っていた。憧れを現実に変えるべく、大学は教育学部の小学校教員養成体育専修課程に入学しました（入学時、時の大学に1年待つて欲しいといわれ、人並みに浪人も経験しましたが・・・）。

教育学部で4年間学んだ後、小学校教員採用試験を受験しましたが、50人の採用枠に1000人が受験するという非常に狭き門で、願わず正式採用にはなりませんでしたが、正式採用にはなりませんでしたが、臨時採用として熊本県内の小学校の現場で勤め始めました。その後、大学教員になるまで小学校教員採用試験を受験し続けましたが、通算成績は5戦2勝3敗といったところでしょうか（2度最終合格までいただきましたが、今度はこちらからご丁重にお断りしてしまいました）。何かがちょっと違っていれば、今頃どこかの小学校で教壇に立っているはずです。

その後、小学校教員への憧れを心残りにしながら大学院にて研究生生活に入るわけですが、大学院では、体育科教育学の研究室に所属し、小学校の先生が子どもたちに教える時の指針となる学習指導要領の研究や、運動が好きな子、得意な子は様々なことに意欲的に取り組むのではないかといった身体・運動認識と体育認識に関する研究などを行ってきました。また、この頃から保育所や幼稚園にも出かけ、子どもたちの身体・運動能力調査などを行い、それが今日の私の研究や授業に生きています。

3. 幼少期にたくさんの運動遊びをしよう

研究をとおして、子どもたちの身体・運動能力は、個人差こそありますが、おおよそ2～3歳から小学校4年生あたりが人生の中で一番伸びる時期とされています。よって、この時期にいろんな動きのある運動を行うと、子どもたちは青年期、成人期を迎えても、思いのままに体を動かし、充実した運動・スポーツライフを過ごすことができるものです。よく、小さい時から一つのスポーツクラブ、スポーツ教室に入って、特定の種目に取り組んでいらっしゃるお子さんもいますが、同じ動きばかりですと関節や筋肉に負担がかかり、怪我や故障の元になります。将来一握りのスポーツ選手を目指すのであれば、この時期は偏ったスポーツではなく、いろんな運動に挑戦し楽しんで欲しいものです。そのためには外で元気よく友だちと遊ぶことが良いですね。ある程度の紫外線は子どもたちの

骨格を丈夫にするのに役立ちますし、友だちと遊ぶことでコミュニケーションの取り方や、ルールを守ること、時には勝手、わがママがぶつかりケンカをすることもあります。そこで我慢や相手を思いやる気持ちも生まれるでしょう。なにより、日中体を動かして思い切り遊ぶと、お腹もすきますし、夜もぐっすり眠れますね。



自然の中へ 江津湖でウォークラリー

4. 次世代の子どもたちのために

運動が好きな子どもたちを育てるのに大きく関わってくるのが、子どもたちが一日の大半を過ごす保育所や幼稚園です。そして今、私は保育士や幼稚園の先生を目指す学生を育てる場と責任を与えられています。子どもたちが主体的に運動遊びを行うためには、楽しい活動でなくてはなりません。楽しい活動にするには、それらの活動が保育者から与えられたものであっても、最終的には自分たちで成し遂げた、自分たちでやっているという実感をもたせることが大切になってきます（ここが保育者の力量といわれる部分ですが・・・、なかなか一朝一夕にはいきませんね）。私の授業では、保育者を目指す学生が、幼児教育の指導者になるために、まずは運動や遊びの面白さを知ってその面白味をどうやって子どもたちに伝えていくかという実践的な授業を展開していきます。そこには、遊びを提供する前の事前計画から事前準備。子どもたちの前に立った時の保育者の表情や声なども含めた雰囲気。遊びを展開するなかで、どの子も夢中になれているかという子どもたちの遊びのレベルと子どもたちの技能との配慮。けがや事故が起こらないかという安全面の配慮など、

幼児体育の指導者として学んでほしいことが多岐に渡って含まれています。



宮崎県五ヶ瀬ハイランドにて雪上遊び

また、近年保育や幼児教育を学んでいる学生でも、生活体験や運動遊び体験が依然と比べて豊かではない学生が増えてきています。そこで、学生時代の間に様々な経験をしてもらうために、「はないちもんめ」や「かんけり」など昔から伝えられてきた遊び（伝承遊び）を含め、熊本ではなかなか体験しにくい雪上遊び（スキー、スノーボード等）や氷上遊び（アイススケート等）を取り入れています。また、江津湖や立田山、熊本城など熊本の豊かな自然にも目を向け、自然の中へ学生を連れ出しています。そこには運動遊びの経験の修得だけではなく、保育者として必要な生活経験充実をも狙っているわけです。

学生をとおして、彼らが将来育てていくであろう熊本県内の子どもたちに少しでもお役に立てればと思い、学生共々日々研究中です。



熊本の豊かな自然の中で
次世代の保育者を目指して

（本研究所研究員 幼児体育）